

【一本のわらが人生をかえる】

自分を変えたいからと、あらゆる自己啓発書を読み続ける人がいます。

ポジティブシンキングが大事だと書いてあれば、「私はすごい!」「やればできる!」と念じたりする。一時的に「できるかも」と思えたりしますが、長続きはしません。

家において、今までの生活パターンで自分を変えられ人はほほいませぬ。お坊さんだって、自分で自分を変えられないから出家するのです。

いったん、その生活パターンの外に出ましょう。

ヒントになるのが、私が大好きなお話「わらしべ長者」です。舞台は奈良県のあるお寺。

一所懸命働いても生活が楽にならない若い男性が、そのお寺の観音様に相談をするところからストーリーが始まります。観音様のお告げは、「このお寺を出て最初につかんだモノを大事に持って行きなさい」というもの。お寺から出た男性は、すぐに転んでしまいます。「イタタタタ」と立ち上がったときに手につかんでいたものが、一本のわら、わらしべでした。

そのあとの展開をご存知の方も多いでしょう。観音様のお告げだとわらしべを握りしめていたら、アブが飛んできた。ブンブンうるさいので、捕まえてわらしべに結びつけて歩いてみると、大泣きする男の子をかかえて困ったお母さんがいたので、「おもちゃがわりに」とアブ付きのわらしべをあげる。すると男の子は機嫌を直し、お礼にみかんをもらう。こんな調子で物々交換を続け、みかんが反物に、反物が馬に、馬が屋敷になり、最後はお屋敷の主人になるというストーリー。

都合が良すぎる話のようですが、とても大事な人生の教訓が語られています。

なんでもいい、一つのわらしべを握りしめて外に出たということが大切なんです。

「わらしべ」とは、ただのわら。すごい武器じゃないところがポイントです。

高校生の頃の私にとって、英語はわらでした。とにかくお寺から出たくて、なるべく遠くに行きたかった。外国に憧れていた私は、英和辞典の例文や恋愛映画のセリフを必死で丸暗記し、お寺に外国人観光客が来れば、たどたどしい英語で話しかけていました。

「海外に出て働く。そこで外国人の彼女もできたりなんかして……」と妄想しながら覚えた英文こそ、私にとつてのわらしべでした。その後、高校二年のときに英語塾を始めて一年で一二〇万円、大学生の頃には月七〇万円を稼いだこともあったからです。

片づけコンサルタントの近藤麻理恵さんのわらは、「片づけ」というとても地味なものでした。家の中で一人で片づけをしていたら家がきれいになるだけですが、そのわらを握りしめて外に出ていき、本にしたことでベストセラー作家になったんですね。今はさらに海外に出られて、世界的な人気と尊敬を集めています。

このわらしべをつかんでいない人は、悶々もんもんとします。苦しいんです。

なんでもいい、あなたの「わら」を握りしめて、ちょっと外に出てみてください。ゲームが好きならゲームをつくる人になってもいいし、料理が好きならとことん料理にハマってみる。

ヒントは、あなたが異常なぐらい夢中になれること。没頭してやり込んだ何かが、将来につながっていくんです。そのわらしべが長者になる入口だったと、後になって気づくことでしょう。

(大愚和尚『人生が確実に変わる大愚和尚の教え』)